

聚楽園大仏とは

聚楽園大仏は、昭和2年(1927年)に完成した日本最初の鉄筋コンクリート造大仏です。完成当初は日本最大の大きさを誇りました。大仏を建立したのは山田才吉という実業家で、私財を投じて「昭和天皇御成婚記念事業」として大正13年(1924年)に工事着工し、3年の月日をかけて完成しました。山田才吉が亡くなった後は企業の所有を経て、昭和58年(1983年)から宗教法人大仏寺の所有となり、多くの市民の寄付によって大規模な修理が行われました。聚楽園大仏は、誰でも訪れることができる公共性を持った建造物として市内外から親しまれており、東海市のシンボル的存在となっています。



開眼供養の様子（昭和2年）

指定文化財としての聚楽園大仏

市指定文化財(名勝) 昭和58年(1983年)11月24日指定

聚楽園大仏及び境内地は、下記の点を評価され、名勝として指定されました。

- ・聚楽園大仏の尊容は高貴にして品格のあるもので、慈愛に満ちた半眼は瞑想的な深みをたたえ、高い美術的観賞上の価値がある。
- ・境内地は伊勢湾に面した高台にあることから、その優れた風致景観が認められる。

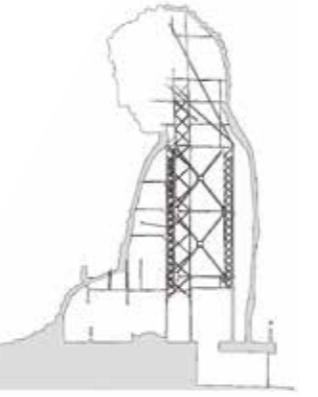
市指定文化財(建造物) 令和3年(2021年)2月18日指定

聚楽園大仏及び仁王像は、主に下記の点を評価され、文化財建造物に指定されました。

- ・建築時点では日本最初かつ最大の鉄筋コンクリート造大仏であった。
- ・コンクリートの強度が極めて高く、鉄筋コンクリート造の造形の新たな可能性を示した技術的にも先進性を有した建造物である。
- ・誰もが訪れる能够性をもった建造物として市内外から親しまれており、地域の景観形成の中心的役割を果たしている。

聚楽園大仏の構造

聚楽園大仏の内部は空洞で、仏殿が設けられています。大仏を支えるのは背骨のような鉄骨の柱と周りの4本の柱で、構造の中心となる鉄筋コンクリートは厚さが10~60cm程で、一番外側はモルタルで滑らかに仕上げられています。



聚楽園大仏の断面図

※コンクリート…セメント+水+細骨材(砂)+粗骨材(砂利)等からなる。
主に構造体に用いられる。

※モルタル……セメント+水+細骨材(砂)等からなる。
主に建物の外装や仕上げに用いられる。

聚楽園大仏ができるまで

聚楽園大仏には現代の建造物のような設計図はなく、原型となる小さな像を作り、これを拡大して、コンクリートを流す型枠を一段ずつ組み立てて建造しました。

① 実際の大きさの10分の1の大きさの木彫りの原型像を作ります。



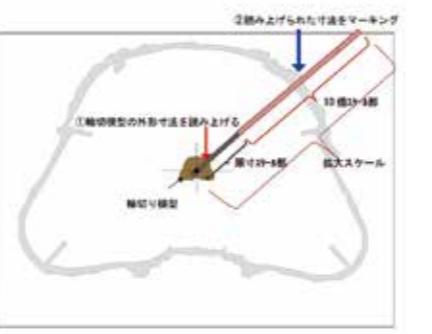
① 画像は同じ建造方法の西尾市常福寺の大仏(刈宿の大仏)の原型像

② コンクリートの型枠を一段ずつ作るために原型像を横方向に輪切りにして、特殊な物差しで実物大の大きさに拡大した線を描きます。

③ 背骨となる鉄骨を作っています。鉄骨の根元は地中深く埋められているようです。

④ 拡大した線を基に太さ1.3cm程の鉄筋を縦横18cm程の間隔で組み合わせて、鉄筋コンクリートの芯となる鉄筋を組んでいきます。

⑤ コンクリートを流すための高さ60cm程の型枠を作っています。3次元形状の複雑な型枠であったようで、当時の技術の高さがうかがえます。



② 原型像の拡大（模式図）

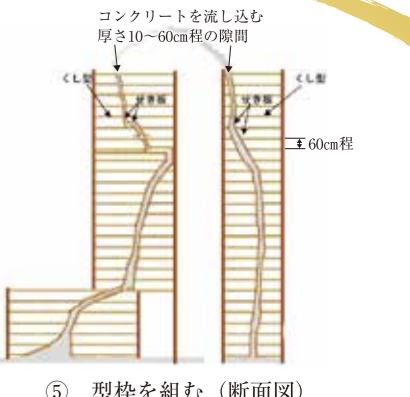
⑥ 何段か型枠を作った後、コンクリートを流していきます。セメントなどの大量の原料は、海側の斜面に作られたエレベーターで運び上げられました。

⑦ ④~⑥の作業を繰り返して大仏を建造していきます。高所へは中央の鉄骨に設けたエレベーターでコンクリートを運んだようです。

⑧ 大仏の外側を仕上げていきます。芯となる金網(ラス)を固定して、モルタルを塗り重ねていきます。この時に色を混ぜることで着色していました。

⑨ 内部のエレベーター等の設備を撤去して、仏殿などを作ります。大仏の後ろ側には荷物搬入用に大きな穴が開けられていましたが、内部の仕上げの際に埋められました。

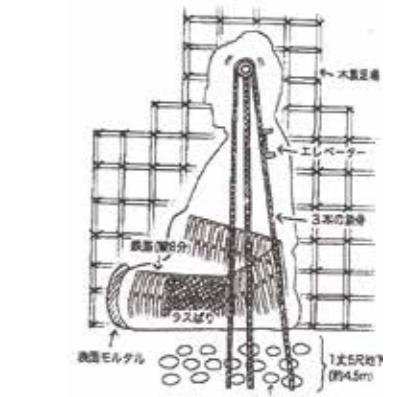
⑩ 台座などを仕上げて完成です。



⑤ 型枠を組む（断面図）



⑥ 聞き取りに基づくイメージ図
(原図提供：村瀬至高氏)



⑦ 聴き取りに基づくイメージ図
(原図提供：村瀬至高氏)

聚楽園大仏まめ知識

・白毫(大仏のおでこ)は透明なガラス製で、かつては電灯を組み込んで灯台のように光っていたと伝えられています。現在内部に残っている電灯の跡は、戦後に取り付けられたものようです。



内部に残る電灯の跡

・仏陀の髪の毛(螺髮)は、108個あるとされています。聚楽園大仏の螺髮は後から取り付けられており、上部の明かり取りの窓を含めて108個あります。



上空から見た螺髮